

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.127

多摩風土記（武蔵府中熊野神社古墳）

府中市西府町の熊野神社境内にある小山は古くから古墳ではないかと言われていた。平成一五年からの調査で、国内最大・最古の上円下方墳であることが確認された。一段目が一辺約三二M、二段目が一辺約二二Mの方形、三段目が直径約一六Mの円形、全体の高さ約六Mの三段構成の古墳で、築造当時の姿に修復されている。JR南武線西府駅下車。（健介）



俳句が好き、
俳句を創る人が好き

前田 弘

東京多摩地区現代俳句協会が創立三十五周年を迎える。昭和五十八年七月十七日、国分寺勤労福祉会館に於いて創立総会が開催されている。発足当時の名称は現代俳句協会多摩地区協議会と称した。出席者七十九名により会長斎藤拙夫氏、事務局長沢田改司氏を選出された。「働く協議会」を旗印に活動を開始、十一月二十日には第一回俳句大会を開催、翌年二月十一日には新春名刺交換会、三月十八日には青梅吉野梅郷吟行会、十一月十八日には第二回俳句大会、十二月二日には史蹟めぐりバスハイク等、次々と活動を展開してゆく。

五十九年十月一日には会報「多摩のあけぼの」を発行。編集

後記に「俳句を通じて友情の輪を拡げ、お互いの絆を深めることを第一義とする当協会にふさわしい会報を作ること目標とした」と、飯名陽子さんは記している。そして平成元年二月十一日には合同句集「多摩のあけぼの」を刊行。斎藤拙夫会長は「序に代えて」で『働く多摩地区』『愛される多摩地区』の五年間の成果は定着いたしました。これからは『声をかけ合う多摩地区』として親和力を高め、三橋敏雄氏の提唱する『フレンドリーライバル』の姿勢で将来の俳句を考えてゆきたいと思えます」と、記している。

ところで、平成十八年一月に上梓したばかりの第四句集「まっすぐ、わき見して——」の「あとがき」に、「六十を過ぎてから、精神の成熟よりも肉体の若返りを希求していることも確かである。そして、『俳句を作ることには俳句に戴いた縁を生きたこと』という思いも強くなっている」と記している。あらためて合同句集「多摩のあけぼの」（第一集）を繙き、俳句に戴いた縁の不思議に触れてみたい。

どこまでも消えゆく蝶のひかりかな

遠山 陽子

実はほかの所属誌「歯車」には定例会がなかった。中学時

代に俳句に手を染め、三十年以上になるが、句会に出席したことは一度もない。そんなほくが第三句集『余白』を縁に、遠山陽子さんから超結社の句会「吽の会」へのお誘いを受けた。巷間、「句会に顔を出す人は俳人、出さない人は詩人」と言われるが、自分自身の中でも「俳人なんてまっぴら。普通の人が俳句を作っているだけ」という思いが強かった。

現代俳句協会に入会する時も随分躊躇したが、会の女流先輩から「これも浮世の義理よ」と諭されしぶ了承した。そんなほくを俳人仲間ひつぱりこんだのが陽子さんだった。彼女のお誘いがなければ、とつくに俳人前田弘は、どこかでのたれ死にしていたに違いない。

切り口が眩しい冬木のモノローグ 山崎せつ子

ところで、平成二年三月発行の会報「多摩のあけほの」の「句集紹介」欄に『余白』を紹介してくれたのが山崎せつ子さんである。「自由で闊達な表現は、季語に別な表情を見だし、句に特有な広がりを与える効果になっているように思う」との寸感を戴いた。この句集紹介を契機に、多摩地区研究句会にも出席するようになった。句会の席上、斎藤会長から「しっかりとお礼を言いなさいよ」と、紹介された彼女とも長いつきあひとなる。

草案の獣いろいろ十三夜

岩崎清太郎

定例句会のない「齒車」のほくが、吟行会の経験がないのは当然である。そのほくが生まれて初めて参加した吟行会が、第七回青梅吉野梅郷吟行会であった。

午前十時日向和田駅前集合という案内に従い青梅線日向和田駅に向かった。駅頭で会の旗をもち、待ち受けていたのが岩崎清太郎さんだった。にこにこ近づいてきて、「皆さん、もう

先に行っていますよ」と。しかし、多摩に知っている人は誰もいない。吟行会のオリエンテーションがあるかと思っただがそれもなし。前日からの風の冷たい梅郷を右往左往しながらどうにか句会場へ。次々と廻ってくる短冊から五句を選出、という。そこまではよいとして、選後の合評になり途方にくれる。メモした句以外は手がかりがない。その後、吟行のたびに、清太郎さんからあれこれ手ほどきを受けた。ありがたいことである。

ひぐらしや西行の背をみてゐたり 澤田 正博

吽の会や多摩の定例句会で席を同じくする仲間である。平成二年、第五回最優秀新人賞を受賞した正博さんが「多摩のあけほの」の第一集に参加していたことは驚きだった。

酔海鼠のするりと透ける世紀末 澤田 正博

「一瞬の空間把握の中に、難しさと面白さを知り、これからも流魄のなかで頑張り続けていきたい」と受賞の言葉を述べている。その正博さんはもう居ない。六十代の半ばであっただろうか。無念である。

炎天へ首干しにゆく人形師

沢田 改司

空を切る燕百景変転す

田村 實

斉藤拙夫氏の後を継いだ会長である。第二代沢田改司、第三代田村實の下に十二年間、幹事として働かせて戴いた。沢田会長の時代は総務部・副幹事長、合同句集「多摩のあけほの」(第三集)の編集、田村会長の時代は広報部長・副会長及び合同句集「多摩のあけほの」(第四集)の編集に携わった。多摩現俳協の活動を通して、多摩の地勢だけでなくそれぞれの地域の微妙な表情まで学ばせていただいた。俳句が好き、俳句を創る人が好きな人に恵まれた多摩地区をこれからも大事にしていきたい。

梅見月の頃、金子兜太師は逝かれました。
水脈の果て炎天の墓碑を置きて去る

兜太

この句は、敗戦後兜太師が最後の復員船の甲板に立つて遠ざかるトラック島を眺めて詠んだ句で、その後の俳句人生を歩む決断をした大きな節目の句です。著書「あの夏、兵士だった私」に、トラック諸島での悲惨な日々が記されています。トラック諸島は現在のミクロネシア連邦チューク環礁のことで、二百四十八もの大小の島々からなります。当時主要な島には四季、曜日、植物の名がつけられていました。夏島は兜太師が初めて降り立った海軍の中心基地（連合艦隊、潜水艦の基地）で、銀行、郵便局、新聞社、花街など。秋島は艦上攻撃機の基地。芋畑、野菜畑、米やタバコ栽培の試験場。竹島はゼロ戦の基地、楓島は艦上攻撃機の基地。

魚雷の丸胴蜥蜴這い廻りて去りぬ 兜太
楓島のジャングルにひっそりと積まれていた魚雷のことを詠んだ一句。

古手拭蟹のほとりに置きて糞る 兜太
島々を見回りにしている時、椰子の木もパンの木も何もない波打ち際での一句。空襲よくとがった鉛筆が一本 兜太

夏島で陸海軍混ざり合つての戦場句会
の一句。
椰子の丘朝焼しるき日々なりき 兜太
海に青雲生き死に言わず生きんとのみ

兜太

翌日、秋島の広場に全将校が集められ、玉音放送を聞いたさうです。

トラック諸島での惨劇は内地からの補給路を断たれた後の食糧不足から飢死する恐怖との闘いにあつたと兜太師から伺いました。主計課中尉として食料調達は

トラック諸島雑感

石橋いろり

死と隣合わせだったさうです。グラマン戦闘機の爆撃の中、ボンボン船で島から島へと芋など食糧を運ぶ。備蓄米や食料も焼かれ、食糧不足になる。秋島の裏側のジャングルを切り開いてサツマイモ畑を作つても、肥料は乏しく夜盗虫に襲われ、「沖繩百号」という品種を試しても芋の葉を皆喰われてしまう。自足は困難に困難を極めたさうです。

話は飛び、大戦より遙か前、諸島が日本の委任統治領の時代に、私の祖父は海

軍の通信隊を指揮し、潜水艦に乗りトラック島に駐留したさうです。その時、トラック島に生育の良い「茄子」が無いため、静岡より茄子の苗を取り寄せ、大きな茄子が沢山収穫でき、現地のカナカ族の人にも苗を分けてあげたさうです。とても喜ばれ、親しく名前を唄にして呼ばれたさうです。

昭和五年の改造社版の「日本地理大系満州及南洋篇」にはトラック島の農産物は里芋、麵麩樹、タロ芋、鳳梨とありました。

師の著書には「前任の主計官が秋島に野菜畑を作つて、タバコも栽培していた」とありました。祖父の植えた茄子はどうなつたのでしょうか。もしかして、秋島の野菜畑に同じDNAの茄子があつたのでは。いや、兜太師がカナカ族から譲られた食べ物にその茄子があつたのではと妄想が膨らみます。

犬は海を少年はマンゴの森を見る 兜太

珊瑚環礁の美しい海辺からマンゴの森を見ているカナカ族の少年。漫然と森を眺めたのではなく戦場に巻き込まれていく命の森を見たのでしょうか。

トラック島で詠まれたこの句は今年の現俳カレンダーの表紙を飾りました。

あけぼの集

人の世は生死しょうじ一如にょや夜の夏書げがき 東久留米 青村 萌生
 土器の文様しるき芒種かな 国分寺 秋山ふみ子
 竹の子やぐらぐらの歯を兎はいぢり多 摩 足立喜美子
 雲の峰埴輪の視線定まらず 清 瀬 穴原 達治
 蟻と戯る一万步越えたから 稲 城 新井 温子
 光陰や四葩に背を押されけり 八王子 荒川勢津子
 咲き満ちて待つこと忘る夕さくら多 摩 有坂 花野
 平和とはふつうの暮らし麦の秋 国分寺 安西 篤
 陶枕や頭痛肩凝り恋模様小 平 石橋いろり
 春逡巡父が迎へに來たと母 八王子 市川 春蘭
 ここだけの話し活き活き春炬燵 青 梅 一ノ瀬 順子
 母の字の書き順違へ走り梅雨 粕 江 伊東 類
 びいどろの微かな音色陽炎へる 調 布 絲布 みこ
 竹落葉頷いてゐる笠 智 衆 町 田 稲吉 豊
 落ち着かぬ果物ナイフ雷しきり 練 馬 岩崎清太郎
 南風に赤兎ひとりに乗つてくる 東村山 岩田 夏恵
 アナウンサーの笑顔の練習福寿草小 平 植竹 利江
 枇杷とどくプラハウイーンを旅したと 東久留米 上原 重一
 帰省して早速父の畑もの町 田 宇賀いせを

ゆくりなくなんぢやもんぢやの花に会ふ 小金井 浮海 早苗
 朝顔のみんな空向きファンファーレ 西東京 内田 牧人
 合鍵を子らに持たせて曼殊沙華 粕 江 梅沢れい子
 森の音ほたるぶくろの中にまで 武蔵野 江中 真弓
 掘り進む夏 地球のみやこ出で來たり 府 中大井 恒行
 キラキラと言葉わき出る夏はじめ 立 川 大友 恭子
 夏木立そのひとの髪真白くて 三 鷹 大森 敦夫
 和食人氣飢え知らぬ娘の鯨嫌たみい 昭 鳥 岡崎たかね
 木槿の祈り同じ箸もつ 民 同 士 武蔵野 岡崎 万寿
 四の五のと言訳ばかり梅雨に入る 小金井 岡本 久一
 清明やバタバヤの道に拾はれし猫 飯 塚 奥野 亜美
 ワルツからルンバに梅雨の自習室 国 立 長田 和江
 麦熟れて『東方見聞録』の 国 立 折原あきの
 葉桜や散歩ぶらぶら 隅田川 多 摩 鍵尾 閑人
 硝子戸やこの頃來ない雀の子 多 摩 鍵尾 美鶴
 暗いよと沖より寄居虫たちの声 多 摩 柏田 浪雅
 雲途切れ首天に向く赤い薔薇 国分寺 加藤 道代
 木苺の甘さ時間を止めている 稲 城 門野ミキ子
 神の旗揺れ夏っぽい足音 西東京 金谷サダ子

あけぼの集

弛緩せる我を一喝夏燕日 野亀津ひのとり
 薔薇の園かすかに頬笑む車椅子 西東京河 順子
 風光るきびこまやかな手話の指さいたま 河井 時子
 葱坊主どこを向いても危険なり立 川川島 一夫
 前略葉桜も見事だ草々稲 城川田 忠雄
 緑さす松本「草間彌生」展調 布菅 さだを
 キヤデイさん春蟬ですとゴルフ場清 瀬神崎 幸子
 つくしんぼ仲良きこともくたびれる小 平城内 明子
 子供の日こどもの言い分大人びて練 馬岸本 陽子
 黄梅の没論理して浮いている八王子 国枝金之助
 喚声を聞いたあの日の夏競馬 西東京 幸村 睦子
 初恋のリラ咲く頃に手紙書く 東村山 五藤 航
 旅先のメーデー固き茹で卵町 田小山 健介
 君逝きて早やひととせや巴里祭 東久留米 紺谷 睡花
 栗咲くや犀うつうつと柵揺らす 西東京 近藤 斗升
 宰相の手套から出す蜥蜴かな立 川今野 修三
 春日傘たたためば本当の孤独多 摩 齊田 仁
 振り向けば呼んでいたのは紫木蓮 東大和 境 英子
 青葉降る生死一枚いのち漉く八王子 櫻本 愚草

重たさを水に移して八重桜 東久留米 佐々木克子
 九十九里を一望にして風涼し府 中笹木 弘
 虹を舐め口中甘く目覚めたり調 布佐藤 茉
 雨蛙はたと鳴きやむ暗さかな府 中佐藤八重子
 前の人に隠れて覗くまむし草青 梅沢田 改司
 芒種なり牛馬それに猫の手も八王子 柴 れいこ
 ゴールデンウィーク白い花白い蝶 昭 島芝崎 綾子
 こどもの日こどものような父がいる 練 馬島 彩可
 風光る昭和を知らぬ親子づれ 西東京 白尾 幸子
 熱中症かかりし蝶を匿いぬ調 布白戸 麻奈
 和蠟燭揺れ百物語はじめませう 世田谷 鈴木 浮葉
 全身を午睡にゆだね春の雨立 川鈴木かずえ
 寝転んで五月の空を満喫す小 平鈴木 寿江
 血はさびしポトリ椿の落ちる音 練 馬鈴木りつ子
 先走る自分に追いつけぬ酷暑町 田 栖村 舞
 時として悪女とならむ椎の花板 橋 諏訪部典子
 目借時電車の揺れも心地よく 東村山 瀬尾 恵澄
 御神籤の中吉小吉亀の鳴く小 平 関 梓
 山の水滴壺に即転生す町 田 関根 曳月

あけぼの集

悲しみのように水ある白菖蒲 武蔵野 高野 公一
 重馬場の話題梅雨入の武蔵野線 清 瀬谷村 鯛夢
 梔子が匂う暗闇 千鳥 足稲 城 玉木 康博
 贅沢な孤独まぶしい朴の花 日 野 玉木 祐
 心地良いひとはけの風はや真夏 調 布 田村 清子
 公園のベンチ日傘が美を競ふ 東久留米 田村 實
 和太鼓の半拍ずれて盆おどり 三 鷹 田山 光起
 萬緑や産着に白き風遊ぶ 稲 城 地原 光夫
 父似でも母似でもなく田を起こす 三 鷹 中條 千枝
 桜散る変哲もない 日常が八王子都筑 遊
 オルガンの一音狂つて梅雨入りす 八王子 辻 升人
 白雲は蒼穹の花 山 笑 ふ 東村 山 寺尾 令子
 百円眼鏡かけ百歳の春が見ゆ 立 川 遠山 陽子
 武蔵野の農ここにあり麦実る 西東京 戸川 晟
 いい風が来て若楓のさやさや 杉 並 飛永 百合子
 茨なして爆ぜるとき待つ 諸葛 菜 相 模 原 鳥海 高志
 母の日や難産だったかも知れぬ 清 瀬 永井 潮
 溪流の瀬音を集め夕河鹿 町 田 長澤 義雄
 ふらここに夜風がそつと乗りにくる 小 平 中條 啓子

青嵐高齡社会ただならず 西東京 中田とも子
 鯉幟伊吹風を一気飲み 国分寺 中野 淑子
 噴水のあわいを風の通りけり 座 間 長野 保代
 夾竹桃戦後の記憶燃えたたす 青 梅 中村ゆき子
 姫の駕籠行き交ふ峠 山法師 武蔵野 夏目 重美
 燕来る旅より戻る子のごとく 八王子 夏目 瑤
 さらはれし人々鳥となり 帰れ 町 田 成戸 寿彦
 玄関に我家育ちの蜥蜴来る 世田谷 西前 千恵
 麦秋の入曾をすぎてチェロの人 昭 島 西村 智治
 デコボコでも平和が宜し ぺんぺん草 多 摩 拔山 裕子
 人生の 平 平 凡 凡 心 太 三 鷹 根岸 敏三
 ところてん言葉の要らぬ 間柄 三 鷹 根岸 操
 溪流の色持ち 帰る 沢山 葵 小 平 野口 佐稔
 石文を読み引き返す 青葉 闇 青 梅 萩原 芙沙
 人影はいつも揺れいて 葉桜す 東大和 橋爪 鶴磨
 かつこうかつこう切株で 弁当 武蔵野 蓮見 順子
 風流をかたちにするば 柳かな 武蔵野 蓮見 徳郎
 満員の蕎麦屋 マラソン 応援 団 羽 村 花貫 寥
 水平線のみで佳しとす 夏館 町 田 原口 海人

あけぼの集

このごろは頓に茄子漬旨くなり川 越原田 麦吹
 前世はたぶんになげん蠅生る日 野日野 百草
 友の訃音なんじゃもんじゃの花が降る青 梅樋口 光江
 青梅をごろごろ洗い恙なし多 摩平山 道子
 衣更えて帝国ホテルの孔雀の間横 浜藤井 みき
 空腹を満たせばうらなる眠り鎌 倉藤倉 頼江
 梅雨寒や煙草のけむの輪を飛ばす練 馬淵田 芥門
 樹々渡る天狗を見たり青嵐多 摩星野 幸子
 うすくなる地縁血縁遠花火羽 村堀部 節子
 八月六日天井裏にイエス様国 立前田 弘
 スカンポが赤らんでくる祖父のよう国 立前田 光枝
 つつじ燃え芍薬すくと初産祈願木更津松本 まり
 螢がとまり私は草になる八王子松元 峯子
 横縞のTシャツが好き海を恋う 東久留米 三池 泉
 薔薇園を出て憧れのひとに会う 東久留米 三池しみず
 眉をひく女の矜恃春ならひ小金井三浦 土火
 死にたれば小蟹は潮へ身を合わす多 摩三浦 文子
 伝言板は既にまぼろし著莪の花町 田三木 冬子
 確かなる母胎の記憶春の海国分寺水落 清子

悲^スしみ^{ター}の^バ聖母^トの^マ歌終戦^テ日三 鷹水野二三夫
 鄧麗君^{テレサ・テン}流るる酒楼三鬼の忌日 野満田 光生
 梅雨入りや太宰語りし友遠し小金井宮井 洋子
 病^{やまい}床^{レド}抜けて匂うや春の夢昭 鳥宮川としを
 山裾の家べつたりと大西日昭 鳥宮腰 秀子
 来し方はもう陽炎になつて三 鷹宮澤 雅子
 十葉も花園となる庭の隅小 平宮寺 幸子
 泣き顔を見て見ぬふりの小あじさい小金井村井 一枝
 柿若葉秋の収穫目裏に多 摩村山 良
 ニコニコと来る雨男花菖蒲武蔵野望月 哲土
 一喝を黒板に打ち夏期講習立 川山口 楓子
 ほととぎす時間どんどん透きとおる町 田山崎せつ子
 アイシーユー青く灯して春遠き東村山山崎美紗緒
 永らえよ青葉は日々にまだ繁る府 中山本 徳子
 亡骸の足袋を脱がすも縁なり府 中吉澤 利枝
 古本屋店番爺も目借時東大和吉田雄飛子
 絹莢の蔓が伸びる夜兜太の宙 東久留米 吉平たもつ
 沈黙も言葉のひとつ夕端居国 立吉村春風子
 大股も小股も一歩山開き青 梅渡部 洋一

荒川勢津子

菜の花やほっこり卵かけごはん

岩崎清太郎

終戦の後先、鶏卵はご馳走でした。卵は糲穀をクツションにして保存されたものです。世界状況の不安を感じる昨今ですが、七十余年平安に暮せて来た幸せを思います。「ほっこり」に穏やかな日常生活を連想いたしました。

伊東 類

着ぶくれて時折高齢者です

前田 光枝

「時折」に作者の心模様が映し出され、自分はまだまだ行けるという古いへの挑戦が心理の底にはあるようです。同時に高齢への懼れと優しさが滲み出ています。あまりつべこべ言わないシンプルな作風が一層の緊張感を盛り上げています。

岩田 夏恵

十万億土たんぼの笑いすぎ

前田 弘

昔、母によく人は死ぬとだれでも十万億土と云う遠い道のりを一人で行かなければならないと聞かされ、子ども心にも不安と恐ろしさに悩んだものでしたが、たんぼが笑っている道だったら何だか楽しそうです。

鍵尾 閑人

落ちる陽を拾いにゆかむ春の海

蓮見 徳郎

作者は静かな波打ちぎわに裸足で立っていた。夕陽が今にも海に落ちてしまいいろんな感じがし、作者はとっさに、両手でその夕陽を拾いあげなければと思ひ、今にも駆けだして行こうという、情感のこもった景がよく見えてくる。

加藤 道代

胸中に休火山あり花ミモザ

山崎美紗緒

胸中の活火山も長い人生を歩いて来るうちに休火山となり、おとなしくして居るのでしょう。でも忘れてはいません。花ミモザが穏やかな日々の暮らしを伝えてくれます。誰もが共感する一句。

川島 一夫

春キャベツ残り時間のように剥く

平山 道子

善い意味での巧い作家なのだが、この句の表現は少し気になる。つまり残り時間を本気になって残り時間と捉えているからだ。作者の体調が案じられる。しかし春キャベツのふわふわ感を残り時間のようにとは流石である。

岸本 陽子

日脚のぶ終活その他手につかぬ

水落 清子

老いを感じ始めるようになると終活のことが気にかかる。寒さがゆるんできたので今した方がいいのか、まだ早いのかいろいろ考えてしまう。決断力の無さが嫌気がさし時間が経って何も手につかなくなる。どうしたものか、ケセラセラ。

五藤 航

山脈の火事と見まがふ冬夕焼

境 英子

山脈は秩父連峰かと思う。真赫な冬夕焼けに染まっている様を、山火事のようにだと作者は云う。太陽は核融合して多大なエネルギーを発す。スケールの大きな景です。

佐藤八重子

寄せ鍋やホンビノス貝もの申す

鳥海 高志

不本意なホンビノス貝に「もの申す」と、自己主張させるのは、興味津々です。ホンビノス貝は、素焼きより油を使う方がおいしかったですが、寄せ鍋の言い分も気になりました。

島 彩可

雑念を払へばのこる寒さかな

岡本 久一

雑念を払えば、身にのこるこの寒さ。裏を返せば、作者の気を散らす余計な事柄、雑念にこそ人間らしい温かいものが流れていると云うことか。俳諧味と、人に対する優しい視線、そしてその真理に唸らせられる。

清水 弘一

お疲れさま葉桜の幹撫でている

松元 峯子

花の季節は蕾の状態から心浮き立ち、散り行く様を見届けて安堵する。名残りの花から葉桜に、花への愛しさは樹木への感謝の念となる。今年の本舞台の喝采の念を込め葉桜の幹を撫でる。桜の俳句では当代一の作者。笑みも…。

白尾 幸子

お疲れさま葉桜の幹撫でている

松元 峯子

樵が峠でいつも一休みして、桜の紅色の木皮を愛でていると、ある夜桜の精が訪ねてきて…。という民話を思い出した。毎年、桜の命の輝きは私に希望を与えてくれる。視点を変えての作者の優しさが伝わってくる共感の一句。

鈴木 寿江

葉の花やほっこり卵かけごはん

岩崎清太郎

政治、経済、スポーツ等、問題の多い世の中、この句を読んだあたたいかい、ほっこりとした気持ちになりました。緑豊かな田園風景を眺め白いあたたかい御飯に生みだて卵をかけて食べる。そんなのんびりとした余生を送りたいものです。

柘村 舞

落したポケットを探しに出た春

川名つぎお

ポケットそのものを落とした。勿論入れているものも落とした。だが、入れていたものは何だったのか。それすらも忘れてしまふ。もうポケットなんて探すのはやめよう。ポケットのような人生だったから、ポケットはもはや要らないのだ。

諏訪部典子

万葉の歌碑のまはりに鳥交る

有坂 花野

万葉歌碑のまわりで「鳥交る」のを見た作者、生きものが命を嗣いでゆくように千三百年もの年月を紡いで伝わってきた『万葉集』も又、次の世代に受け継がれてゆくのだと、『万葉集』の永遠性を説いていられるようで感銘を受けました。

高野 公一

星月夜抹香鯨は立って寝る

植竹 利江

抹香鯨が実際に立って寝るのかどうか知らない。事実かどうかは意味のないことだ。読者は、まるで星空を見たいがために立って眠るかのような鯨を、その海を、その星空を、その宇宙の静寂と一つの命を心に描けば足りる。

田村 清子

ひとりだけ遠回りする春の月

岸本 陽子

あの夜の大きな月は忘れません。見た人が皆遠回りしたくなるほどの大きな月でした。

月は希望を与えてくれる。
ステキな句です。

地原 光夫

春キャベツ残り時間のように剥く

平山 道子

最近では加齢のせいか人生の先を考えて作句する事が多くなった。掲出句はキャベツという「もの」に対して己様の様を捉えて余念がない。俳句も詩という文芸であり抒情詩である。観念的と見る人も居るかも知れないが当らない佳句と見た。

中條 千枝

流れつくハンゲルの文字忘れ汐

三浦 土火

ひところ韓国の難破船が流れつき、痛ましい思いをした。今も岩の窪みなどの忘れ汐にハンゲルの文字のものが、時にみられるのだろうか。そんなに近い間柄でありながら、今もわだかまりが解けないのが悲しい。

戸川 晟

イニシャルのうすれし指輪春灯

佐藤 健

結婚してからもう何年になるのだろうか。結婚指輪のイニシャルが薄れて見えないほどになっている。結婚記念日の春の夜、灯の下でつくづくと見入った。色々とあったがとも角二人で無事でここまで、生きて来た。その感慨を感じ取った。

徳山 優子

春キャベツ残り時間のように剥く

平山 道子

春野菜の中でもひとときわ目を引くふんわりと巻かれた春キャベツ。柔らかく巻かれたキャベツを丁寧剥いてるうちに作者は、自分の残された時間を意識したのでしょうか。毎日を疎かにしない作者自身も感じられる素敵な一句でした。

永井 潮

まやかしの恋愛のよう解ける雪

三池しみず

ほろ苦い自身の体験か、スキヤングラсна芸界の報道からか。恋は、どちらかが冷めてしまえば、一方にとってはまやかしになるのだろうか。前行に「不完全な恋でも待つよ春の闇 三池 泉」があり、母娘の恋愛観を比べて見たりした。

長野 保代

春愁や米印増え検査表

蓮見 順子

通院中なのであらう。種々の検査の米印が増え、その検査表を見た時の心境を「春愁」という季題によつて言い尽くせたのではないかと思いました。共鳴した一句でした。一病息災という言葉もあります。大切にしてください。

中村ゆき子

十万億土たんぽぽの笑いすぎ

前田 弘

「十万億土」という途轍もない奥深い世界に、身近に咲くタンポポを配して不思議な明るさと笑いを醸し出している。たんぽぽへの視点の効果もさながらに読む人の心を気楽に一句の中に引き込む巧妙さは抜群である。

抜山 裕子

綻びをつくるふ昭和針供養

秋山ふみ子

昭和維新というスローガンを掲げた軍部革新派の活躍が始まった昭和という時代。長く悲惨な戦争は誰も止める術を持たぬまま原爆で終符を打った。その綻びを繕うのは容易ではない。心をこめて針供養をして次代に引き継がなければ。

萩原 芙沙

菜の花やほっこり卵かけごはん

岩崎清太郎

作者は炊きたて御飯に卵を割り静かに混ぜている。何となく菜の花色に：外は黄色の絨毯を広げたように菜の花が咲き誇り、ほっこりとした朝の景が浮かび感慨深い一句。因みに産みたて卵の温かかった感触と昔が甦った一時だった。

蓮見 徳郎

ハイタツチしてより逢はず冬茜

吉澤 利枝

「やったね」「よかったね」「元気でね」嬉しく挨拶を交わしてそれっきり。今頃どうしているだろう、相手を思う気持ちかふと立ち上がる冬茜。時の経過、心の振幅、その奥にある作者の心根。まさに俳句の五七五の世界。

林 みよ子
着ぶくれて時折高齢者です
前田 光枝

この俳句を読んで、作者は多分活動的な方だろうと想像しました。普段はいろいろな事をこなし、時々年齢を意識します。「時折」という措辞は含蓄があると思えます。「親近感がわきます。年は考えなくてもよし、又時折考えるのもよしと」。

藤倉 頼江
生きものに前生後生帰^{ぜんせいごしょう}り花
安西 篤

生けるものすべて前生後生があるとしてもそれは誰にも分らぬこと、確かなのは現生のみ、いずれ行く後生へは一人旅、あたえられた運命を生きるしかない。花も現生をよしとして帰^{かえ}り咲くか。禅問答のようなむずかしい句だが素通りできなかつた。

前田 弘
落したポケットを探しに出た春
川名つぎお

「つぎおさん！どこへゆくのか？」「うん、どこかにポケットを落してきたらしい」「えつ、ポケットを？」で、左が入つていたの。「右のポケットには夢、左にはチューインガム。つぎお少年にはかけがえのない昭和のポケット、春の夢だ。

三浦 文子
春光と向き合つて切る足の爪
梅沢れい子

拝読後たちまちやわらかな透明感に包まれた。一方で晩年の父を想つた。「爪を切つてくれないか」が帰省の度に発せられる一言であった。固くて曲つた爪を少しでも楽に切るため、爪用のニッパーを探し回つたりした。ほっこりと懐かしい。

三木 冬子
おおかみも猪^{しし}もジユゴンも涅槃絵図
岡崎 万寿

兜大師は白寿を待たず二月梅の時期に逝つてしまわれた。涅槃絵図よろしく師を囲んで悲しみに沈む等しく生命あるものたち。中七のジユゴンでより広く深い句となつた。兜大師の句に「誕生も死も区切りではないジユゴン泳ぐ」がある。

宮澤 雅子
白髪となる糸桜くぐるたび
遠山 陽子

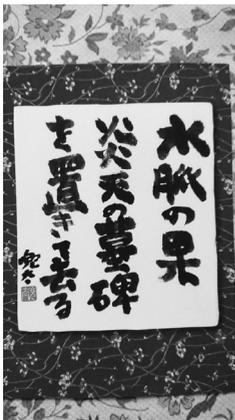
染井吉野でもなく、山桜でもない、糸桜を潜るたびに髪に白さが増すのだという。表面的には加齢を嘆いているようではあるが、そうではないだろう。毎年春に会うよろこびの感慨ではないだろうか。かえつて若ささえ感じられるのだ。

山崎美紗緒
山脈の火事と見まがふ冬夕焼
境 英子

日没が一年で最も早い冬。その短かい東の間の冬夕焼けを見ている作者の孤独感のような心情が伝わってくる。山火事のよな紅蓮の冬夕焼けに感動している裏側に潜む、空虚さや明暗が何故か物悲しい。

山本 徳子
補聴器の高いキー音尉鶺
河 順子

難聴者は補聴器をただ付ければ良いというわけではない。特に高音は内耳、頭の奥へキーンと響くものである。尉鶺の鶺は「火焚」で、火打石をたたくような音を出すのでこの名がある。可愛い鳥だが傍に来ても声は聞き取りにくい。実感です。



あけぼの便り

- 鳥海高志様、百二十六号で拙句を採り上げて頂き有り難うございました。オランウータンに感謝です。(足立喜美子)
- 123号で佐藤八重子様、126号で絲布み子様、拙句をお取り上げ鑑賞下さり有り難うございました。私にとりまして何よりの励みになります。(一ノ瀬順子)
- 宮崎斗士様、前号で拙句をご講評していただき有り難うございました。これから励みになります。(植竹利江)
- 「多摩のあけぼの」を毎回興味深く読ませていただいております。皆様の洗練された作品に触れることができ有り難く思っています。どうぞお体大切にお過ごしください。(梅沢れい子)
- 立春の日、諸般の事情で、山猫ルツシー(本名デッシー)と子別れましたが、失敗。今も餌係をやっています。(奥野亜美)
- 吉平たもつ様、126号誌上にて拙句「固く巻くシヨール黒潮大蛇行」をお取り上げ鑑賞くださり、嬉しくお礼申し上げます。(折原あきの)
- 藤野武様、初めて投句した拙句を前号で
- ご講評いただき大変嬉しく感動しております。これからの人生のはげみになります。俳句を続ける意欲が湧いてきました。(神崎幸子)
- 「ポケットにドルもユーロも巴里祭」―村山義一。その日が命終の日とも思わず句集に遺している。なくなつてから早くも一年が経とうとしているが、立川駅の改札口で、今もその姿を探してしまうのが限りなく切ない。(紺谷睡花)
- デイケアに週二回通う身となり、吟行などはしばらく出かけられず残念ですが、前を向いての毎日を心がけて居ります。今は俳句が生き甲斐です。(寺尾令子)
- 新しく俳句研究会の受付を担当することになり、今まで長い年月、佐々木克子さんがこなしていた仕事をいかに大変なことであつたかを痛感しました。新米はしばらくばたばたいたしますが、温かく見守って下さいますようお願いいたします。(夏目瑠)
- 126号で拙句を鑑賞して下さいました渡部洋一様、大変有り難うございました。身に余る光栄に存じております。(萩原美沙)
- 前号で拙句をお採り上げ鑑賞くださった
- 佐藤健様、まことに有り難く嬉しく励みになりました。お礼申し上げます。(藤井みき)
- 木更津に住んでおりますが、永井潮先生よりご紹介頂いて参加しております。とても勉強になり、「多摩のあけぼの」毎号楽しみにしております。編集部のご多忙を何もかも感謝しております。(松本まり)
- いつもお世話さまになりました有り難うございます。六月五日より左記へ転居いたしました。今後ともよろしくお願いいたします。
〒158-0087 世田谷区玉堤一丁目一四
マノワール玉堤一〇一 (三浦文子)
- 国立市の「とれたの」で売られていた地場野菜のらぼう、大根のおろぬきを友人からもらいました。のらぼうは、西東京地区辺りに以前からあるとか。大根のおろぬきは、疎抜くのことか。こちらのスーパーでは定番のものしか売られていないのでとても新鮮でした。(三木冬子)
- 「あけぼの集」へ投句した「スターバト・マーテル」とは、欧州の中世宗教詩に出てくる聖母のことです。多くの作曲家が曲を付けています。(水野二三夫)
- ごぶさたを重ねて申しわけありません。

七月の大会には何としても出席したいと思っております。(宮川としを)

○八十歳になると縫い物が出来なくなるからと言って、夫の綿入れ半纏を縫ってくれた母も夫も今は亡い。私もその齢、やりのこしたものでだらけ。後悔しないように日々過ごしているつもりですが、老いを受けとめあるがままの自分に向き合う(吉澤利枝)

第3回 俳句研究会

3月17日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三 佐々木克子 玉木康博

夏目 瑤 山崎せつ子 稲吉 豊

佐藤八重子 戸川 晟 大森敦夫

参加者35名

★講話……吉村春風子氏

「芭蕉とその弟子たち

〔蕉門十哲〕

逢いにゆくことも終活梅の花 藤井 みき
まだあると信ずる未来耕しぬ 吉村春風子
落椿姿勢はなおも崩さずに 根岸 敏三
花林檎目は幸せといつている 水落 清子
初蝶や母やもしれず低く飛ぶ 西前 千恵
千里とぶ夢もありなむ亀の鳴く 山口 楓子
ふと映画みたくて街へ空海忌 白尾 幸子

いつもさうひとつ足りない春の椅子 稲吉 豊
三月のけぢめを付けし本の山 関 梓
あの風は父だつたのか花菜畑 柏田 浪雅
春の日を二日切り取り二人旅 野口 佐稔
春眠やうちの婆さんまだ起きぬ 三浦 土火
もう少しやさしく言つて春一番 戸川 晟
電車待つ少女の横顔春立てり 松元 峯子
落椿あんがいが気楽かも知れぬ 佐々木克子
些かもとどまる気なし雪雫 荒川 美恵
口外はしないと約束沈丁花 大友 恭子
三月やそして誰も居なくなつた 櫻本 愚草
古草や母の思ひをなぞる日々 夏目 瑤
草の戸の句も新しや卒業生 夏目 重美
明日咲く薔薇一輪に賭けてみる 飯田 玉記
命水切子に注ぐ春彼岸 玉木 康博
これは梅あれは桜と伊豆の旅 石橋いろり
啓蟄や帯をゆるめに締め直す 山崎せつ子
五月の計へ暗い水揉む洗濯機 地原 光夫
つちふるやピアノを運ぶ回収車 根岸 操
朧三日月睫毛の長い寝顔かな 佐藤八重子
佐保姫を見に兜太逝きあきら逝き 永井 潮
あしたとて仮の世ならむ球根植う 越前 春生
白梅や八五郎従へて平次の碑 水野二三夫
護摩木には妻のことか蕨餅 大槻 正茂
つくしんぼ時はいつともうす暗い 淵田 芥門
誰にも縛られずたんぼぼになれる 紺谷 睡花
隧道や陽炎みだす貨車のたり 大森 敦夫

花の雲ドイツ連邦共和国 新井 温子

第4回 俳句研究会

4月28日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 戸川 晟 夏目 瑤 浮海早苗

飛水百倉子 大森敦夫 石橋いろり

関 梓

参加者42名

★講話……永井 潮氏

「広辞苑を覗く」

又の世も夫婦ぞ、そだね四月馬鹿 淵田 芥門
燕来る旅より戻る子のごとく 夏目 瑤
花冷の座席の下の盲導犬 西前 千恵
飛花落花残り時間の中にいる 山崎せつ子
松の芯すくすく育つ隣りの児 佐々木克子
春満月海の匂ひをつれて来る 秋山ふみ子
コーラスの腹式呼吸吸若葉風 山口 楓子
蒲公英が斜面を走る津波跡 高野 公一
カツ井の三葉鮮やか荷風の忌 満田 光生
愛一つ隠して百の落椿 永井 潮
赤ちゃんが足指開く春列車 玉木 康博
日脚伸ぶ五分遅れの電車来る 飛永百合子
生れたての蠅の子ならむ甘やかす 二本松よし子
胡麻塩のあ、上野駅花は葉に 関根 曳月
風光るきめこまやかに手話の指 河井 時子
花菜風赤ん坊とろり生欠伸 門野ミキ子

第5回 俳句研究会

噴水や時には休みたい気分
根岸 操

極上の孤独鮎釣の道具箱
戸川 晟

あるはずの酒蔵探す春時雨
小山 健介

路地裏の五月雨でよし晴れてよし
飯田 玉記

たんぽぽの綿毛と共に途中下車
大友 恭子

小さきとも輪廻の証つくしんぼ
吉村春風子

胸奥に原っぱがあり姫女苑
松元 峯子

永き日の長き鏡にひとの顔
小田 笑

黄塵万丈円周率の厘の先
稲吉 豊

春深し板門店の境界に
浮海 早苗

葱坊主野菜市場でだだをこね
前田 弘

桜葉降るさりげなく隣の手
佐藤八重子

ひたすらに燕飛び交ふ穴太積み
関 梓

荷風忌や踊り子草の見えかくれ
亀津ひのとり

大と極小父子家庭らし鯉のぼり
鈴木 浮葉

受難の碑里を知らざる蝶とまる
水野二三夫

5月26日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 根岸敏三 夏目 瑤 秋山ふみ子

小山健介 根岸 操 佐藤八重子
石橋いろり

参加者 41名

★講話……山田貴世氏
「倉橋羊村 人と俳句」

若葉冷え母の心音背負ひけり
越前 春生

ドアノブにメモと笥ニュータウン
小山 健介

水平線のみで佳しとす夏館
原口 海人

夏蝶や僧一礼の冠木門
山下 遊児

沈黙も言葉のひとつ夕端居
吉村春風子

便箋に筆圧残る走り梅雨
米澤 久子

寺守の後を胸張り羽抜鶏
山田 貴世

颯爽と歩くつもりのもりの更衣
長野 保代

ユトリ口の白を抜け出す夏つばめ
大友 恭子

生年月日言わされている蝸牛
前田 弘

玄関に我家育ちの蜥蜴来る
西前 千恵

心太ふさぎの虫をひと突きに
二本松よし子

途切れなく線路を潜る蟻の列
根岸 敏三

五月風真実告げて瞳の安堵
宮井 洋子

花大根青い電車の音消えて
高野 公一

葱坊主どこを向いても危険なり
川島 一夫

名にし負ふ偉人麗人薔薇の園
水野二三夫

枇杷の実や太陽の子を遊ばせて
根岸 操

うすれたる味覚嗅覚木の芽和え
水落 清子

青鷺や風切る羽音空を蹴る
白尾 幸子

巫女寄せのあの飛び交ふ金華山
夏目 重美

竹落葉頷いてゐる笠智衆
稲吉 豊

風鈴や遊び尽さむ身の限り
鈴木 浮葉

家族てふややこしきもの桐の花
平井 照子

梅雨寒の青き炎に海苔を焙る
松元 峯子

白日傘魚を覗き見つめらる
新井 温子

山背風女戦の紅を引く
三浦 土火

三味の音や「隅田の花火」七変化
石橋いろり

昭和記念公園吟行会

平成三十年五月十二日(土)

若葉の薫りを漂わせて吹く快い風。まさに薫風に心も体も洗われる五月の一日。JR西立川駅から続く広大な国営昭和記念公園での吟行会でした。新緑と花々の競演、爽やかな光と風、溪流と水車の音、鳥たちの声、敷地いっぱい広がる虞美人草(シャレーロボビー)の花の丘は圧巻でした。

句材に恵まれた今回の吟行会。句会場は日本庭園の茶室「観楓亭」にて二十九名の参加者による囀目二句出句、五句互選。上位十名に賞品が、また特別選者の方々からの特選賞も手渡されました。

最高得点句は山口楓子さんの「えこの花一りん落ちてへりの音」でした。至るところにえこの白い小花が香り、不粋な自衛隊のへりの音に気がそがれる感じが十二人の共感を得ました。また、一人一賞で選から漏れましたが、同じ作者の「何の樹と問ひて近づく夏帽子」も高得点でした。

当日吟行中、飛び始めた蜻蛉をきっかけに知り合った方がお一人、急遽飛び入りで

参加されました。門戸を広く開いている多摩の句会らしさが証明された思いがしました。(石橋いろり記)

上位入選十句

えこの花一りん落ちてへりの音 山口 楓子
風光る昭和を知らぬ親子づれ 白尾 幸子
武蔵野の農ここにあり麦実る 戸川 晟
ポビー揺れ仕合せさうな自撮棒 稲吉 豊
悲しみのように水ある白菖蒲 高野 公一
踏青や集団は崩れやすきもの 永井 潮
空が広いすつくと罌粟が赤すぎる 山崎せつ子
東屋にいい風呼びぬ若楓 宮井 洋子
逝くときは御花畑に溺れたし 根岸 操
みどり濃淡曼荼羅につつまれる 佐々木 克子

一人一句

えこの花恋の虜に熊ん蜂 関 梓
古民家に箱膳ならぶ薄暑かな 秋山ふみ子
山法師その真白さを持ち帰る 飛永百合子
薫風やベツト同伴誓約書 西前千恵
ポビー揺らして風の鬼ごっこかな 笹木 弘
黙す池分けて水脈引く夏の鴨 関根 曳月
オクターブ高き子の声ポビー咲く 水野二三夫
公園のてくてくマップ緑濃し 吉村春風子
漣の一つ起こさず初とんば 原 耕一
薫風を肺の中までいい日です 宮澤 雅子

和名ならすらつと言えるけしの花 岸本 陽子
水涸れの川の癒しや山法師 夏目 重美
俯く日外方向く日のシャレーロボビー 石橋いろり
貸しポート漕ぎ手はどれも父なりし 根岸 敏三
木漏れ日の光をはじく滝の水 長澤 義雄
踏まずには行けぬか思案いぬふぐり 夏目 瑠
吟行の青葉若葉や不如帰 三浦 土火
カラネオガタマ熟したバナナの香を放ち 佐藤 八重子
写生してすこす仲間や苔清水 大森 敦夫

合同句集『多摩のあけぼの』第七集 刊行

多摩地区現代俳句協会は、創立35周年記念事業の一環として、会員の合同句集を発行することになり、現在作品を募集中です。今迄はほぼ五年毎に出しており、前回は創立30周年を記念して平成二十五年に第六集を出版しました。今回、それ以降の作品をお一人二句、タイトルをつけてお寄せください。既発表、未発表は問いません。新しく会員になられた方の参加も大歓迎です。お近くのお仲間にも、この機会に入会を勧めて下されば有り難いです。

参加料は1冊に付き二千円、締め切りは八月三十一日です。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

平成三十年度

定時総会

平成三十年三月二十五日(日)
於・武蔵野スイングホール

第三十六回平成三十年度定時総会・陽春句会は穏やかな春日和の中、七十七名の出席を得て開催されました。新役員の大森敦夫氏の司会により、恒例の会歌である多摩のあけぼのを斉唱。永井潮幹事長の開会のことばに続いて、柏田浪雅会長の挨拶となりました。

冒頭、先月二月二十日に他界された金子兜太氏の逝去を悼み、黙祷が捧げられました。会長職を退くにわたり、九年の長い間の歩みを振り返り、今後の現俳の裾野を広げる活動についての道筋について述べ、今後の活動の場を本部に移されると抱負も語られました。

新会員の紹介の後、来賓三名の渡辺澄千葉原協副会長、川村研治神奈川原協副会長、松田抱空都区協副幹事長のご祝辞を頂きました。

議長に戸川晟氏、副議長に浮海早苗氏を選出し議事に入りました。

- 一、平成29年度事業報告
- 二、平成29年度収支及び会計監査報告
- 三、平成30年度事業計画案

四、平成30年度収支予算案
五、役員改選の件

以上、右の議案が全て原案通り、承認・可決されました。

新会長の吉村春風子氏の挨拶のあと、退任の役員四名（柏田会長、三浦土火・江中真弓の両監査役、藤井みき広報部幹事）に花束が贈呈されました。

休憩後の陽春句会は、特別選者二十八名の選の披露、成績発表が行われ、上位十名の入賞と特別選者からの特選賞が手渡されました。来賓のお三方、安西篤氏等顧問、参互、監査役などから丁寧な講評を頂きました。

地区協報告では、今年度は現俳多摩創立三十五周年の節目に当たり、合同句集（各自十二句）発行の予定。また、五月十二日の昭和記念公園への吟行開催についても案内がなされました。稲吉豊副会長の閉会の辞により無事総会は終了。

休憩を挟み、同一会場にて懇親会が開催されました。

乾杯のご発声をお松田抱空都区協副幹事長に頂き、一気に会の雰囲気や和み、柏田会長がアンコール曲も含め三曲のシャノンソンを熱唱。会場は一挙に華やき、俳句談義に花が咲いた模様。麗かな春の宴となったのではないのでしょうか。

（懇親会司会 石橋いろり・記）



戸川議長・浮海副議長



吉村新会長挨拶



新旧会長と新事業部長の石橋さん（中央）



来賓の渡辺さん、松田さん、川村さん

平成30年度予算案(平成30年1月1日～同12月31日)

(単位:千円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
本部助成金	500		
地区会費	110		
事業収入	1,500		
雑収入	1		
		事務費	10
		通信費	4
		印刷費	20
		会報費	610
		会場費	5
		交通補助費	35
		交際費	55
		事業費	1,310
		会議費	35
		雑費	5
		創立35周年 記念事業費	50
合計	2,111	合計	2,139

期首資金残 1,276

当期収支見込 △28

期末資金残見込 1,248

平成30年度俳句研究会及び行事案内

◆俳句研究会	開催地
第1回 平成30年 1月27日(土)	立川(子)
第2回 2月24日(土)	立川(子)
第3回 3月17日(土)	立川(子)
第4回 4月28日(土)	立川(子)
第5回 5月26日(土)	立川(子)
第6回 6月23日(土)	立川(子)
第7回 7月28日(土)	立川(子)
第8回 8月25日(土)	三鷹(か)
第9回 9月22日(土)	立川(子)
第10回 10月27日(土)	立川(子)
第11回 11月24日(土)	立川(子)
第12回 12月22日(土)	立川(子)

◆主な行事			
平成30年 3月25日(日)	平成30年度 陽春句会	定時総会・ 陽春句会	武蔵境
5月12日(土)	春の吟行会 (昭和記念公園)		立川
7月29日(日)	第36回俳句大会		武蔵境
11月17日(土)	秋の吟行会 (武蔵国分寺公園)		西国分寺
◆会報「多摩のあけぼの」編集発行			
平成30年	1月	4月	7月 10月 各月の28日頃発送予定

平成三十年度 陽春俳句会作品

入選十句

時々はキリンが食べる春の雲 望月 哲土
 遺言のように書き出す初日記 永井 潮
 戦争の昭和に耐えた雛飾る 沢田 改司
 手のとどく高さの生活桜草 木下 蘇陽
 初鏡作り笑いを力とす 一ノ瀬順子
 雑踏のわれも一個の春埃り 岡本 久一
 青き踏み素足に伝ふ地の鼓動 吉村春風子
 きさらぎの時間が白く逃げていく 山崎せつ子

風花舞うモーツァルトの譜面より 佐々木克子
 いのち惜しむかに平成の春惜しむ 紺谷 睡花
 日輪の近付いて来る猫柳 穴原 達治
 冬木の芽もれてしまった独り言 前田 光枝
 草の芽に躓きしこと追伸に 前田 弘
 春シヨール母の匂いが消えていた 三池 泉
 我楽多市写楽の顎に冬の蠅 堀部 節子
 スーパームーン鏡餅が飛びたがる 高野 公一

木の影とわが影太き二月かな 秋山ふみ子
 水槽の海月にもある人見知り 松戸 圭
 この人もいつか分れる根深汁 白尾 幸子
 久女忌の振り動かぬ喫茶店 根岸 操
 まひるまをまあるく包む春の雪 宮澤 雅子
 むつかしい生き方だったか雪達磨 渡辺 澄
 鬼籍いま万両の実の赤きこと 柏田 浪雅
 春風や地球の軽さ宙に浮く 長野 保代
 東京に智恵子の空や三が日 折原あき子

踏む踏まぬそつとしておく霜柱 関 梓
 春着着て仏の母に逢ひにゆく 越前 春生
 詰襟に喉仏あり卒業す 戸川 晟
 見送りしその後は知らず雪降り 清水万ゆ子
 初太鼓大気が硬くなつており 小山 健介
 貰い手にやつと旅立つ雛かな 野口 佐稔
 骨太に生き故郷の野良坊菜 堀部 嘉雄
 独り言また春愁を深くする 冬木 喬
 春風に揺れる想いの便り出す 三池しみず
 春動くだけでは人は動かない 松田 抱空
 春雷を祝意ときいて合格す 有坂 花野
 大年の夢は果てなしゴビ砂漠 西 遥
 卒業式日本一の母席に 宇賀いせを
 お見送りしたかったなと亀鳴けり 藤井 みき
 父母にもつとも近き春の月 山口 楓子
 豆腐屋のラッパが連れてくる晩夏 大西 恵
 背筋伸ばせば見えてくる春の闇 岸本 陽子
 残雪を融かしてゆきぬ母子の歌 田村 實
 橋上の手話囁らんばかりなり 地原 光夫
 海辺から花菜畑ゆく一両車 長澤 義雄
 山眠る秩父巡礼まだ途中 水落 清子
 いたづらに犬歯と尾骨二月尽 稲吉 豊
 マンションの庭に新築小鳥の巣 西前 千恵
 掴まり立ちの小犬と子犬春の膳 岩崎清太郎
 雀舞うシルバーマークの耕耘機 根岸 敏三
 医者いらず蒔きて毎日医者通ひ 浮海 早苗
 たまゆらの富士のはにかみ寒夕焼 宮井 洋子

奥鬼怒の残痕洗う雪解川 辻 升人
 初雪や脈拍早くなつてゐる 門野ミキ子
 水脈の果兜太逝きけり春寒く 夏目 瑤
 斗為巾の糸の奏でる春の海 佐藤八重子
 両神山や兜太・おおかみ生きつづけ 江中 真弓
 竜天に昇りて多摩を眼下にす 川村 研治
 改元の元朝地球考える 清水 弘一
 冬鳥はカンバスに描かれ動きだす 石橋いろり
 爆発音は原発建屋とアナウンサー 川島 一夫
 春雪や辺り一面やはらかし 三山 喜代
 切り口は年輪に似る大根かな 飛永百合子
 初夢は未だ見ぬ夢の七日かな 三浦 土火
 セーターの花柄どこかの包装紙 宮腰 秀子
 初東雲そのまほろばの液状化 安西 篤
 舞姫のだらりの帯や懸想文 松元 峯子
 包丁で春の七草軽叩き 玉木 康博
 大寒や植輪もみに赤い月蝕 原田 麦吹
 雪こんこん十年前に決めし墓 大友 恭子
 一瞬があふれ煙になる二月 金谷サダ子
 白梅や絵馬にしたため女坂 田村 清子
 はる風に解くる水やチョコ固む 大森 敦夫
 千年を千羽の鶴と春の海 夏目 重美
 辛夷咲き風さゆらぎて道造忌 水野二三夫
 咲き乱る一夜の宴烏瓜 蓮見 徳郎
 蛇穴を出でて艶めく狭庭かな 蓮見 順子



退任役員の柏田さん、三浦さん、江中さん、藤井さん

☆ホームページで速報記事を

現代俳句協会のホームページに、当地区協会の知らせや月例会の報告等が、毎月更新されて載っています。

(蓮見幹事担当)

(アクセス方法)

「現代俳句協会」を検索し、ホームページから(地区活動)↓(北海道・東北・関東)↓(都多摩)と進んでください。

事務局だより

★創立35周年記念合同句集

『多摩のあけぼの』第七集へご参加ください。
応募作品 一人12句(既発表、未発表を問わず)
締め切り 30年8月31日

参加費用 お一人二〇〇〇円(一冊)
(詳細は別紙をご覧ください)

★秋の吟行会

日時 平成30年11月17日(土)
場所 都立武蔵国分寺公園(予定)
(詳細は次号でお知らせします)

★会員の現況(5月末現在)

303名(正会員250名・一般会員53名)
☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員
*押本ゆり(東大和市) *瀬尾恵澄(東村山市)
米澤久子(立川市)

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(申し込み手続き不要)。それ以外の方は年会費2千円です。

お問合せ・ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

関 梓(梓) 満田 光生(光)

飛永百合子(百) 山崎せつ子(せ)

永井 潮(潮)

ご案内

俳句研究会

第8回 8月25日(土) 午後1時

武蔵野市かたらいの道・市民スペース
三鷹駅北口徒歩3分

(とじ込みはがきの地図参照)

*講話 関根 曳月氏

第9回 9月22日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 三浦 土火氏

第10回 10月27日(土) 午後1時

立川市子ども未来センター

*講話 戸川 晟氏

(いずれも会費五百円、出句三句)

〈在宅句会〉(投句参加)

▽開催日の一週間前までに投句してください。

▽出句は一人三句です。(選句はありません)

▽20×3cm程の短冊に一句ずつ書いてください。

▽参加費は千円です。(出句時にお送りください)

▽句会終了後、全作品の得点入り清記用紙と高

点句、出句された作品の成績、寸評等を取りポ

トとしてお送ります。

(投句先) 〒180-0006

武蔵野市中町3-29-19 蓮見 徳郎方

「俳句研究会」投句係宛

編集後記

☆円満字二郎著「漢字の使い分けときあかし辞典」が面白い。漢字の同訓異字の概念図はユニークで、読み物としても楽しめる。(梓)

☆前号より広報部に加わりました。仕事の都合等で俳句研究会にもなかなか出席できませんが、会報発行のお役に立てればと思います。(光)

☆梅雨真つ盛りである。紫陽花が生き生きと雨を喜んでいいる。しかし次には猛暑の季節が待っている。体調には気をつけたい。(百)

☆夫の介護に明け暮れる日々、心残りを感じながらも句会に出かけるのがせめてもの息抜きです。つとめて明るい俳句を作りたい。(せ)

☆句会での追悼句は後を絶たない。六月二十二日に行われた兜太先生のお別れ会。花に囲まれた遺影の先生は、およそ八百人の列席の人々に今にも話しかけそうな笑顔だった。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

平成三十年七月二十六日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井 潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒195-0055 町田市三輪緑山1-28-1-9

TEL 044-987-1171 稲吉 豊方

印刷所 株式会社 清水工房

TEL 044-262-0126

TEL 044-262-0126